

2010年代後半の日本の雑誌における「セックスレス」をめぐる言説
-カップルのコミュニケーションの観点から-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学情報コミュニケーション学研究所 公開日: 2022-05-30 キーワード (Ja): セックスレス, 雑誌メディア, ジェンダー, 性的主体化, カップル・コミュニケーション キーワード (En): sexless-ness, magazine media, gender, sexual subjectification, couple communication 作成者: 平山, 満紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/22469

2010 年代後半の日本の雑誌における「セックスレス」をめぐる言説ⁱ —カップルのコミュニケーションの観点から—

平山満紀*

Discourses on Sexless-ness in Japanese Magazines in the latter half of 2010's — Analysis with the Perspective of Couple Communication—

by Maki HIRAYAMA

日本では結婚したカップルのセックスレスが 2000 年頃以来増加している。その一要因にカップルの性に関するコミュニケーションの不全がある。それに直接間接に影響を与える環境としてメディアがあると言えるが、本研究はその環境としての性質を捉えるため、2015 年から 2020 年の主要雑誌の、タイトルに「セックスレス」を含む記事を内容分析し、男性雑誌、女性雑誌、全ジェンダー向け雑誌に分け特徴を把握した。男性雑誌ではセックスレスはポルノの構成要素とされるか、自嘲や脅しの題材にされるか、まったく記事を書かないかで、女性雑誌の多くはセックスレスの特集を組み、2016 年以降はセックスレスのマンガや小説とも連なって読者に考察の機会を与えている。男性雑誌と女性雑誌で性の表象が完全に異なるのは異性カップルのコミュニケーションを困難にする環境だ。全ジェンダー向け雑誌は 2016 年以降専門家の知見を多く紹介し、カップルのコミュニケーションの環境を変えつつある。

The rate of sexless marriage has increased in Japan since around 2000. One of the factors is couples' dis communication on their sex life. In order to clarify how Japanese media have contributed to this dis communication, we analyze the contents of articles with "sexless" in the titles of major magazines from 2015 to 2020, by men's, women's, and all gender magazines. In men's magazines, sexless-ness is treated as a component of pornography, or as a topic of making fun of losers. Most of men's magazines never focus on sexless-ness. While many women's magazines feature sexless couples, moreover started in 2016 introducing comics and novels on sexless couple, offering the opportunities to consider this topic to the readers. These completely different sexual representations between men's and women's magazines could likely impede communication between heterosexual couples on sex life. All gender magazines have introduced evidenced comments of the experts since 2016, thus would support couples' communication.

キーワード: セックスレス、雑誌メディア、ジェンダー、性的主体化、カップル・コミュニケーション
Key words: sexless-ness, magazine media, gender, sexual subjectification, couple communication

1. はじめに

1.1 本研究の問い

日本における、結婚した異性愛カップルのセッ

クスレス（別居等の特別な理由なく、性交や性的なコンタクトが月 1 回未満）の割合は、調査によると 2000 年頃以降増加し続け、2020 年には結婚したカップル（調査対象者は 20 歳から 60 歳）の 51.9%がセックスレスだという結果が発表されて

* 明治大学文学部 准教授（心理社会学科現代社会学専攻）情報コミュニケーション学部兼任講師

i 本稿は、2021 年 3 月 26 日 EAJS (European Association for Japanese Studies) 学会（オンライン）で著者が口頭発表した英語の原稿を基にし、大幅に加筆したものである。

本論文は、情報コミュニケーション学部紀要編集委員会により指名された複数の匿名レフェリーの査読を経たものである。

This paper was duly reviewed and accepted by the anonymous referees who were appointed by the bulletin editorial committee of the School of Information and Communication.

いる（下図）。終節で述べるように、いくつかの西洋諸国でも 2000 年代以降性交行動が非活性化していることが報告されており、セックスレス現象には、日本社会独特の条件に加えて、21 世紀世界の社会に共通な条件が関わっている可能性がある。しかし、日本におけるこの現象の広がり、調査された限りでは世界的にも群を抜いており、日本社会固有の要因が大きいと考えられる。セックスレスは最初医学領域で問題化されたが、これほど広がった現在では、医学的治療で対処する個人の病ではなく、日本社会の構造が作り出す現象と捉えるほうが適切だろう。

著者はセクシュアリティの社会的構築主義の立場に立ち、21 世紀日本でのセックスレス現象がどのように構築されているかを、日本社会に特徴的なやり方でジェンダー化されたセクシュアリティ（Hirayama 2020）、デジタル・インターネット技術の発達と男性向けポルノ情報の増大（Hirayama 2019）などの側面から分析してきた。セックスレス現象は身体・心理・関係性・生活環境などが複雑に絡んで生じることと、個人やカップルの背景が多様であることが、その研究を通じて一層明らかになった。

セックスレスが生じるのは、女性の社会経済的

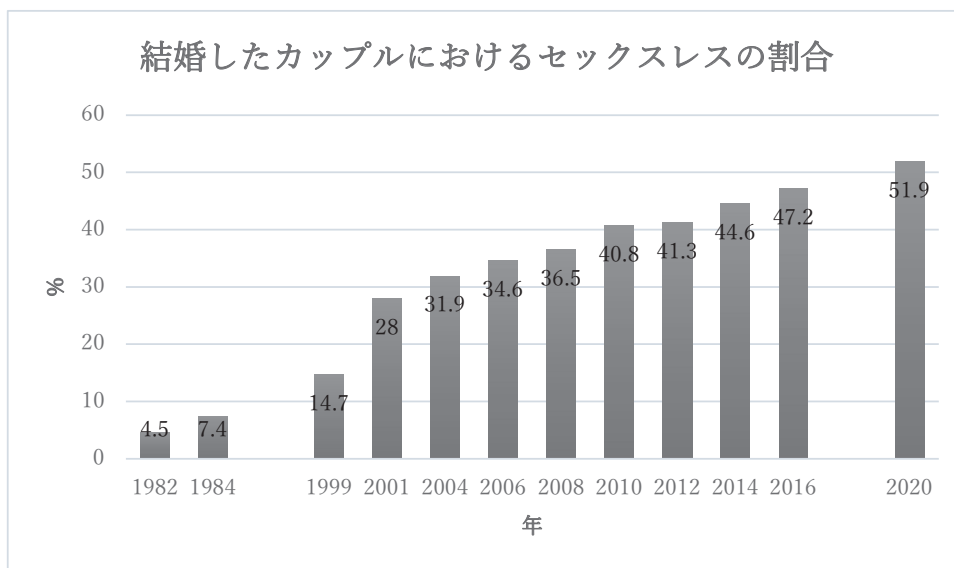


図 結婚したカップルにおけるセックスレスの割合 以下のデータより著者作成

複数の調査のデータなので単純な比較はできない。

1982: 共同通信社『日本人と性』: 20代から70代の結婚した男女 (n=533), (石川他,1984)

1984: グループわいふ『性 妻たちのメッセージ』: 20代から70代の結婚した女性。半数以上が30代。(n=261), (グループわいふ,1984)

1999: NHK『日本人の性』: 20代から40代の結婚したまたは交際相手のいる男女。(n=953), (NHK「日本人の性」プロジェクト編,2002)

2001: 朝日新聞、『夫婦の性』: 20代から50代の結婚した男女。(n=1000)

2004-2016: 日本家族計画協会:『男女の生活と意識に関する調査報告書』: 20歳から49歳の結婚した男女, (日本家族計画協会,2016)

2020: Jex+日本家族計画協会:『Jex Japan セックスサーベイ』: 20歳から49歳の結婚した男女, (Jex+日本家族計画協会サイト)

地位の向上を背景に、女性が自分にとって心地よくないセックスを断れるようになったことがひとつの要因だという、ジェンダー視点からの説は広く支持されている（荒木他 2016）。ある意味で女性の性的主体化がセックスレスをもたらしたと考えられる。しかし多くの女性はまだ、自分にとって心地よいセックスや、自分にとってのセックスの意味を考慮しておらず（パッハー 2020）、その意味で性的主体化が不十分であることもセックスレスにつながっていると言える。そしてまた、コミュニケーション不全も大きな要因だ。パートナーがどのような性的欲望や希望をもっているか互いに知らないカップルが多く、引っ越し、結婚、妊娠、出産などの機会に性生活をどう変えていくかについて相談ができずにセックスレスになるカップルが多い（パッハー 2020）。また、男性は女性の意向を踏まえよう、女性は男性に主導してもらおう、としてダブルコンティンジェンシーが起こる場合もある。（高橋 2020）ギデンズによると、後期近代には主体同士の十分なコミュニケーションで性関係を作っていくことが必要（Giddens 1993）であるにも関わらず、カップル内で性に関して言葉のコミュニケーションができないことが、大きな要因と考えられる。

性に関する知識、言葉、考え、思想などを提供するメディアを、人々の性意識、性行動にとっての、直接間接に影響を与える環境として、本研究は俎上に載せたい。本研究の目的は、日本のカップルのコミュニケーションが、どのような性質の環境をメディアにおいてもっているのかを、明らかにすることである。メディアという環境が、男女のコミュニケーションを促さず、コミュニケーションの困難をもたらしているのではないか、それによりメディアがセックスレスを支える面があるのではないか。本研究はメディアの受け手研究には踏み込まないので、人々がメディアの影響を

具体的にどのように受けるかは明らかにできないが、人々を囲む環境としてのメディアの具体的な様態を、時代的变化も含めて、表象分析を中心に明らかにしたい。

1.2 先行研究

セックスレスに関するアカデミズムの先行研究は、日本ではセクシュアリティ研究の研究者自体が少ないこともあって極めて数少なく、Hirayama とパッハーの上掲論文、奥村他（2020）、荒木他（2016）、玄田他（2007）、荒木他（2002）、NHK「日本人の性」プロジェクト（2002）などに限られる。付言すると、これに対してセックスレスに関するジャーナリストの報告は、亀山（2010）をはじめ多数ある。

ジェンダーとメディア研究のこれまでの動向の俯瞰と今日再構築されるべき方向の提案は、田中（2018）が詳論している。日本での女性雑誌の分析は、（井上輝子、女性雑誌研究会 1989）を嚆矢として豊かな研究蓄積があるが、男性雑誌は（辻 2013）をはじめとしてまだ少数で、男性雑誌と女性雑誌の比較は（劉 2017）など、さらに少ない。また全ジェンダー向け雑誌を対象としたジェンダーの観点からの分析もないようである。

セックスレスをめぐる雑誌記事を分析した唯一の研究（パッハー 2019）では、以下の点を見出した。大宅壮一文庫所蔵の雑誌の検索によると、「セックスレス」を見出しに含む雑誌記事の数は1996年、2006年、2010年に3つの山をもち、2010年以降は減少し続ける。次に2000年から2017年までの期間の「セックスレス 解消法」という2つのキーワードを見出しに含む記事は18件見つかり、その内容分析から、次の特徴を見出した。①解消法を提案するのが、臨床経験をつんだセックスカウンセラーのような専門家ではなく、AV男優、風俗嬢、セックスレスを経験

した一般人など、実効性のある提案ができるとは考えられない人たちであること、②複雑で個別性のあるセックスレスの現実が単純化され、対処法もハウツー的であること。以上の特徴のためこれらの記事はセックスレスの解消には役立たないだろうと指摘する。その一方、パッハーは分析した2000年から2017年間の変化には注目していない。またメディアがジェンダーで分断されていること自体が、異性愛カップルのコミュニケーションを阻害しようという観点もたない。本研究はこの2つの視点をもつため、更なる発見が期待できる。

1.3 分析対象と分析方法

田中(2018)は、ニューメディアの研究が強く求められていることを指摘している。その状況は了解しつつ、本研究ではセクシュアリティのテーマでの雑誌研究がまだ少ないことと、系統的な収集のしやすさの点から、オールドメディアである雑誌を対象とする。Web Oya-bunko 教育機関・公立図書館版(一般読者向け全国誌の、購読者の多い主要な雑誌が収蔵されている)で、記事のタイトルに「セックスレス」が含まれるものを2015年1月1日から2020年12月31日までの間で検索し、得られた記事150件のうち、単なる「セックスレスが広がっている」等の短報、外国の話題や創作作品等は除外し、日本の現実をとらえてメッセージを発信している122件を対象として、内容分析をおこなう。下に述べる分類法を適用すると、男性向け76件、女性向け25件、全ジェンダー向け21件である。

日本では男性雑誌、女性雑誌という区分が一般に使われる。日本雑誌協会が毎年改訂する「雑誌

ジャンル・カテゴリー区分一覧」では、『AERA』『サンデー毎日』などを含む「総合月刊誌」「一般週刊誌」の多くは自動的に「男性向け」に、趣味雑誌は自動的に「男女向け」に区分されるが、読者層の現実を反映していないイデオロギーであろう。現実には、女性雑誌を男性が読むことや逆もあり、読者層の性別は必ずしも明確ではない。本稿では日本雑誌協会が男性向けと区分する雑誌でも、毎日新聞『読書世論調査』2018年版ⁱⁱで、読者の3分の1以上は女性のを、全ジェンダー向け雑誌と区分する。この基準によると『AERA』『サンデー毎日』『週刊朝日』『週刊新潮』『週刊文春』『壮快』『日経エンタテイメント』は全ジェンダー向け雑誌に含まれる。『ダヴィンチ』『ゆほびか』は女性向け、『Will』は男性向けとなる。読者の年齢層については「社会実情データ」ⁱⁱⁱサイトおよび、各雑誌の出版社サイトを参考にした。

記事分析はよく用いられる調査方法で、イメージ分析、レトリック分析、用語論的分析など、多様な質的、量的分析方法が開発されてきた。本研究の対象は多種の雑誌の記事で、グラビアから論文まで形態が多様で長短もあるので、幅広い記事に適應できるよう、「著者、記事の視覚的レイアウト、見出し、記事のテーマ、記事の構成、言語的・修辭的手段、記事のメッセージ、その他の特徴的な事柄」を要素として取り出し、質的な内容分析をおこなう。記事のメッセージの内容では、セックスレスの意味付け、セックスレスに対する姿勢の2点に着目する。

ii <http://honkawa2.sakura.ne.jp/3969b.html> このページでは毎日新聞社「読書世論調査」2013年と2018年データをグラフ化している。

iii 同上

2 男性向け雑誌

2-1 男性向け週刊誌

男性向け週刊誌の多くは2015年～2020年の時期には、実質は高齢者向けとなっている。「セックスレス」を見出しに含む記事では、セックスレスという言葉はポルノの構成要素となる場合が多い。連載が2020年に約500回の「隣の家の淫ら妻」というヌードグラビアでは、中年女優やモデルが「結婚15年セックスレス」(20190829『アサヒ芸能』)などの告白とともにヌード写真を提供する構成が多く(20201022『アサヒ芸能』)、「グラビア袋とじ セックスレス熟女10人」(201909『アサヒ芸能』)などの企画もあり、グラビアの設定としての、欲求不満の女性が不倫相手を求めるというフィクションに「セックスレス」は完全に組み込まれている^{iv}(20191114、『アサヒ芸能』、20190131『週刊実話』、他10件)。「鷺谷人妻熟女デリヘル セックスレスに体がうずく」(20180927『アサヒ芸能』)では、出張サービスのセックスワーカーたちは、夫とセックスレスで欲求不満のためにセックスワークをしているのだという、女性たちの貧困の現実を完全に無視したポルノ的妄想が表象されている。このような表象に繰り返し触れる男性たちは、セックスレス—欲求不満の人妻—人妻不倫、という連想を強固にすると推測できる。女性芸能人の「セックスレス離婚」「セックスレス破局」などのセックスレスにからめたゴシップ記事(20200903『週刊実話』、他9件)も多く、彼女たちは性的な視線で見られている。セックスレスは、これらの雑誌ではほとんどの場合、ポルノの道具立てとされるが、読者である男性が自分

自身のカップルでセックスレスになっていたとしたら(その確率はとても高いのだが)、自分自身のセックスレスをどのように捉えているのだろうか、疑問である。

その中で例外的な記事「男たちよ、反省しなさい!中高年夫婦の「セックスレス」、セックスに対する妻たちの不満」(20150704『週刊現代』)がある。妻が夫に直接言えない不満や恨みを、代わって雑誌が伝えるという企画で、都合のよい妄想に逃げ込まず女性たちの不満を直視する点で、異色と言える。しかし、見開き頁に4割くらいの面積で「夫とのセックス、ここが気持ち悪い」と巨大な見出しを掲げ、女性たちの嫌悪や不快の言葉を紹介する本記事は、読者を途方に暮れさせるかもしれない。これに対し「久しぶりにセックスするにはどうすればいいか。セックスレスを解消した妻帯者の話を紹介」(20200125『週刊現代』)は、3人の高齢男性のセックスレス解消体験を紹介するが、夫婦の親密なコミュニケーションがリアリティのある描写で描かれて、同誌にも試行錯誤が見られる。

さまざまな解決法を提案する記事もある。性的能力を回復させるツボ(20190117『週刊実話』)やサプリメント(20170116、20151002『週刊ポスト』)、予防食や呼吸法(20190214『アサヒ芸能』)の紹介など、パートナーとの関係性に全く触れない対処法も少なくない。20190218『週刊大衆』では「夫婦で行く日本全国の混浴温泉」を特集し、「セックスレス解消!」と謳っている。「脳イキって何?夫婦のセックスレス解消にも役にたつ?」(20200810『週刊大衆』)のような、変わった話題の提供もある。

^{iv} アダルトビデオ作品にも、「セックスレス」をタイトルまたは内容にしたものは非常に多い。その表象はセックスレスの認識に関して、男性に大きな影響力をもつと推測される。

次に、中年・若者向け男性週刊誌の記事を検討しよう。この年代向けでも、セックスレスをポルノの構成要素とする記事は多い。『週刊プレイボーイ』は「くたばれ、セックスレス！」という連載で、性的に消極的な女性が多い現実を忘れさせるような、AV女優たちが活発な性行動を語るインタビュー記事を掲載し、あわせてヌードグラビアを載せる。(20161205、20161121、20161114『週刊プレイボーイ』) AV女優たちの性体験には、中学時代から避妊なしでセックスをしていたなど性犯罪被害を思わせる内容が多いが、このような女性表象に多く触れ、その偏りを認識する機会のない男性は、性犯罪や性暴力のもたらす傷を誤解するだろう。(2017年以降しかし「くたばれ、セックスレス」の連載はない。)本研究が調査した男性週刊誌で、セックスレスの見出しがポルノグラビア(インタビューを伴うものを含む)、ポルノ小説に使われているものは少なくとも38件に上り、量産されていることがわかる。

中低階層の中年・若者向け男性雑誌『SPA!』は、「SEX格差が拡大中! 35～45歳壮年男性43%が1年以上セックスをしていない」(20150310)と、性生活にも格差があることを指摘し、セックスレス=負け組という意味付けを繰り返す。「40代どんづまりサラリーマン200人アンケート セックスレス69%」(20171017)では、セックスレスは負け組ではなく、勝ちでも負けでもない「引き分け組」に含まれて嘆くことではない、という意味付けに変わるが、その後再び「負け組SEXは人生を蝕む 負け組に転落する人はSEX回数が少ない」(20180529)で、セックスレスは低階層と結び付けられ、自嘲的に語られる。さらに、「「SEX弱者」救済プログラム 勃たない、相手がいない、セックスレスを克服して「したいときにできる」男になる!」(20200121)では、勃起不全、パートナーがいないこと、パート

ナーとのセックスレスの、かなり異なった問題をひとまとめに扱う。SEX弱者かどうかを判定するチェックリストを掲示し、セックスレスを放置すると「うつ病リスク大、離婚の原因に!」と脅す。セックスレスの克服法として、「美人精神科医」が考案した6段階のシナリオに沿って、パートナーとの関係を取り戻す方法が示される。パートナーに心から感謝を伝える、昔デートした場所を再び訪れる、など確かに琴線にふれそうなシナリオではある。しかしこの方法で成功した例があるかどうかは書かれていない。この時点までの『SPA!』のセックスレスに関する記事の頁には、女性のヌード写真がちりばめられているのも特徴である。

しかしこの記事の2か月後の『SPA!』では、記事の方針を転換したことが見て取れる。「50代セックスのリアル」(202003)には、臨床心理学者の荒木乳根子、泌尿器科医の永井敦といった専門家を招き、加齢と男女の性機能の変化やそれに応じた性生活での工夫の紹介や、日本性科学会の調査やカウンセリング経験からの、多くのコメントを掲載している。脅しと鼓舞ではなく、目の前にいるパートナーとの現実的な丁寧な関係性の再構築が目指されるようになった。女性のヌードに代わって、年齢に応じた体位や愛撫を示す下着姿の男女の写真が掲載されている点も異なる。後述する、女性雑誌や全ジェンダー向け雑誌ではより早く始まっていた変化の波が、男性雑誌にも押し寄せていると言える。

セックスレスの解決法を提案する記事には、これとは異なる方向のものもある。『サイズー』(201909)では、「ソリューションとしての不倫」を提案し、『FLASH』(20181204)では「夫婦セックスレスは妄想NTRで解消する!」と題し、NTR(寝取られの頭文字)つまり、妻が他の男性に寝取られるさまを妄想して夫婦生活を復活さ

せることを提案する。いずれもカップルのコミュニケーションの外の行動である。

2-2 男性月刊誌

「ラブ&セックス特集 2016 年度版」(201603『GQ JAPAN』)は、男性雑誌の中では異色な特集だ。トップページのタイトルでは「真実の性愛のための 20 のレシピ」と謳い、「細川護熙 春画を語る」「辛酸なめ子が選んだ感じるセックスブック」等の 20 の記事を 30 頁に渉り提供する。セクシュアリティの現在を、ポリアモリー、バイバー、人造ペニスなど、さまざまなトピックから紹介し、三浦ゆえの「女性は自分にプラスとなるセックス、上質なセックスを求めます。不味いものには手を出さない」(106)のような、かなりはつきりしたフェミニズムの主張を複数掲載する。言説分析をするなら、男性読者向けにフェミニスト女性が遠慮なく本音で最新情報を教える、という語り方である。『GQ JAPAN』が米国で創刊され世界 19 か国で刊行されている雑誌の日本版であることから、セクシュアリティにおける世界的なスタンダードであるジェンダー平等の発想が浸透しているとみられる。本誌の作り手が他誌と違う点も興味深く、今後の課題として作り手研究を手掛けたい。

『GQ JAPAN』と『Tarzan』以外の男性雑誌は、ポルノ的な記事を除くと、セックスレスをテーマにした記事を書けるのは『SPA!』のみ、ということに注目すべきである。『Safari』『LEON』『MEN 'S Non-no』『Goethe』のようなファッション・カルチャー誌も、『Brutus』『日経トレンドィ』のようなカルチャー・トレンド誌も、セックスレスの話題には触れない。

これに関連するが辻泉は、男性ファッション誌 11 誌 (2009 年 8 月号) の内容分析、およびロングセラーの 2 誌の時系列的計量分析をおこない

(辻 2013)、男性ファッション誌は女性ファッション誌に比べて、「生き方、ライフスタイル」に関する記事が顕著に少なく、「おしゃれ」に特化していること、セックスに関する記事もほとんどないこと、『POPEYE』は 1980 年代以来デートや恋愛に関する記事を多く載せていたが、2000 年以降はおしゃれに特化したことを見出している。男性ファッション誌はすでに 2009 年の段階で、セックスに関する記事全般も載せなくなっていたとわかる。この動向は資料の幅を広げてさらに追求する必要がある、そのことの内包する意味も探らなければならないと考える。なぜ、2000 年以降、男性ファッション誌はセックスやセックスレスの話題を載せなくなったのか、男性ファッション誌などの読者男性たちは、性に関してはどんなメディアの影響を受けているのか等、研究すべき課題は多い。

3 女性向け雑誌

3-1 女性向け週刊誌

現在は 50 ~ 70 代が読者層の中心である女性週刊誌『週刊女性』『女性セブン』『女性自身』は、セックスレスをしばしば記事のテーマにするが、単にセックスレス現象の広がりには驚くもの (20150119『女性セブン』)、ハウツー的な解消法の紹介にとどまるものが多い。20150317『女性自身』では「なんと 44.6% がセックスレス 精子が増えるレシピ」と料理の話題にそれ、20161011『女性自身』の「セックスレスになる男、ならない男」では、セックスレス予備軍男の特徴 10 を挙げる。20141103『週刊女性』の「マンネリ SEX & セックスレス崖っぷち大胆回避術」では、見開き頁に回避法を 3 人の回答者 (婦人科医、漫画家、ライター) がそれぞれ提案し、加えて新商品のバイブレーターの情報も掲載する。20200414『週刊女性』では、元銀

座のホステスで恋愛コンサルタントの女性が「私は女性にセックスは必要だと考えています。女性はセックスで自分自身の価値を確かめます。」と述べ、「レス解消5つのラブ行動」を紹介する。これも見開き2頁で、断片的、手段的であることは否めない。

これらと対照的に、20170817『女性セブン』の、かつて芸能界で浮名を流した松本人志の発言「セックスレスになってからでしょう、本当の夫婦は」が社会的反響を呼んだことに応えた特集「日本社会に蔓延る「セックスレス=悪」というネガティブなイメージ」は、5頁をあてた充実の特集と言える。他誌が「脱セックスレス」特集を組むことに疑問を呈し、セックスレス=悪という社会的なイメージにしばられるのではなく、当人がどのような性を生きたいのか、カップルとしてどのような関係性を築いていきたいのか、という当事者の生き方を重視すべきだとする。コミュニケーションの延長上にセックスがあるならメリットは大きい、無理に義務感でセックスして身心がボロボロになる女性が多い、という婦人科医の解説や、「夫、妻、どちらかがしたがっていないのか、どっちもしたがっていないのか、といったコンセンサスをはっきりさせているカップルは少ない。」というジャーナリストの解説のほか、この記事に奥行と説得力を与えているのは、自伝小説『夫のちんぽが入らない』の作者こだまの言葉と、セックスレス夫婦がオープン婚に踏み出すという内容の、渡辺ベコのマンガ『1122 (いいふうふ)』の紹介である。こだまは、自身のたどった非常に特異な体験を語り、「今は誰に理解されなくても、私たちはこれでバランスが取れているからいいんだ！って思えるんです。」と述べる。諸橋(2009)は女性週刊誌の2005年の記事を分析し「思考停止メディア」と評したが、本記事はそれとは異なり考えさせられるものだ。思考停止的にセックス

レスの現状を追認するのではなく、性を一人一人が自分で作り上げていく領域として示すものである。この記事の背景には、後述する小説やマンガ領域での女性たちの探求と表現の発達がある。

3-2 女性向け月刊誌

女性月刊誌の特徴として、夫婦関係や性をテーマに取り上げる老舗の『婦人公論』だけでなく、『An an』『Classy』『Lee』『More』などの多くのファッション誌、美容誌『美ST』、家事情報誌『レタスクラブ』など、多くの雑誌がセックスレスに関する大きな特集を組んでいることが挙げられる。これらの記事に多い形式として、悩み相談室がある—「女性の体と性の悩みごと」(202012『Hanako』)、「夜の相談室くらしい」(201908『CLASSY』)、「50のQ&A セックスのモンダイ」(202003『MORE』)「実は知りたい、ホントのところ。SEXあれこれQ&A」(20170816/23『An an』) —。悩み相談は、男性雑誌には見られず女性雑誌では多くある。つぎに、雑誌が独自におこなったセックスに関する調査結果がある—「隣の夫婦のセックス(レス)白書」(202004『LEE』)、「みんなのセックス大調査」(201809『レタスクラブ』)、「モア世代のセックスレスが深刻です！アンケート」(201904『MORE』) —。ついで、読者の体験談(20170411『婦人公論』)(201904『STORY』)もある。上記3つの形式の組み合わせも多い。そして、総合的な内容の「脱・セックスレス読本」(20160210『An an』)などの特集もある。

男性雑誌と比べて女性雑誌では一般に、セックスレスの要因分析は格段に詳細である。例えば「隣の夫婦のセックス(レス)白書」(202004『LEE』)では、自分には性欲があるか、パートナーには性欲があると思うか、自分から積極的にセックスしたいか、夫婦にセックスは必要だと思うか、セックスレスだと思うか、セックスレスの場合は改善

したいか、産前産後で夫婦のセックスが変わったか、産後どのくらいでセックスを再開したか、などの細かく分節化した質問への30～40代女性355人の回答を分析しており、セックスレスにもさまざまなタイプ（本特集では8つに分類）があることを浮き彫りにしている。また女性雑誌では、妊娠・出産・育児期の身体の変化や、加齢による変化、女性ホルモンと性交痛など、女性の身体に関する婦人科医たちの解説も多い。自身の性的身体についての知識の乏しい日本の女性たちへの、性教育の役割を果たしていると言える。

「隣の夫婦のセックス（レス）白書」（202004『LEE』）の調査によると、「性欲がない」という人が子どものいない女性の42%、「自分から夫と積極的にセックスしたくない」人は子どもがある女性の58%にのぼる。他の調査からも女性たちの性的消極性は明らかであり、「性欲がない」「セックスが好きでない」「夫とセックスしたいと思わない」という女性の消極性がセックスレスのひとつの背景になっていることは疑えないが、この事実を正面から取り上げて考える記事はない。女性たちの性に関する知識不足、性的に積極的であるべきでないという規範、性被害体験、性的な幸せな体験の不足などがこの意識を作っている可能性もある。自身の性的身体についてのより深く十分な知識を供与することで、性的消極性を根本的に問い直すことも可能だと考えられる。

悩み相談では、妊娠・出産・育児期のからだに関わるもの、相手に飽きないためにできることなど、多様な質問が取り上げられる中、「何歳までセックスするものですか?」「夫婦にセックスはやっぱり必要ですか?」「仲良しだけど、セックスレスはダメですか?」なども含まれる（202004『LEE』）。セックスレスはダメかどうかを、自分

とパートナーで決めるだけの、性的主体性とコミュニケーションの力が、まだ不足していると言えるだろう。

性的欲望や性感やパートナーとの関係性を把握する力が、一般にかなりの発達を見たのが、2020年現在の女性たちの到達点だと、女性雑誌の記事から見て取れる。しかし、パートナーと互いに、性に関する思いや希望を伝え合うことには、まだ大きな困難を抱えている女性が多い。「私から誘ってみたもののやんわりと断られ続けて、今ではこちらから誘うのも疲れてしまい…」「セックスの不満を彼に伝えられない」等のコミュニケーションの壁は非常にひんぴんと語られる。『An an』「脱・セックスレス読本」（20160210）は、「セックスレス、女の本音と男の本音」と題して4頁にわたり、同じテーマに関して誌面の上半分を女性たち5人の対談、下半分を男性たち5人の対談に当て、男女の考えや性的身体の違いを浮き上がらせる構成をとっている。異性カップルが性に関して深く率直なコミュニケーションをするためには、互いの性のしくみへの知識や理解が欠かせず、このような誌面はもっと増えるとよいだろう。

家事情報誌『レタスクラブ』は2017年5月、セックスレスをテーマにしたマンガ「私の穴がうまらない」の連載を開始した。料理レシピなどを中心にした本誌でのセックスの記事は初めてで、読者の意表を突いたものだったという。編集者は読者の反応をこう語る。「連載中の反響としては、まるで水を打ったような静けさでした。でもアンケートの評価はいつも上位だったんです。一見『性に興味ないです』という感じの方にも、実は真っ先に読んでいただけているというか…。誰にも話せないし相談できないのが『夫婦のセックスレス』の問題なんだと思います」^v日本の女性たちには、

v <https://news.livedoor.com/article/detail/18045567/>

セクシュアリティに関する書籍を手取るだけの積極性を持たない人が多い。家事情報誌での連載は、潜在的な関心を満たすには格好のメディアだと言える。

女性雑誌のセックスレスの記事には、セックスレスをテーマにした小説やマンガ作品を紹介する欄がもうけられることもある。(20170817『女性セブン』)(201609『STORY』)(20160210『Anan』)(201905『からだにいいこと』)数頁の雑誌記事と比べ、小説やマンガ作品は登場人物たちを通して、セックスレスをめぐるひとりひとりのライフコースやライフスタイルを、圧倒的な詳しさと描く。小説やマンガという表現の登場により、セックスレス現象はそれだけが切り取られて捉えられるのではなく、関係性や、毎日の生活リズムや、身体や言葉のコミュニケーションや心の動きなどの、生きる文脈に置かれて理解されるようになったと言える。その文脈は非常に個別的であることも、読者には了解される。読者がこのような理解をもつようになると最早、個別性を軽視した手段的な「セックスレス解消」という発想は、女性雑誌では成り立たなくなると言える。

3-3 背景としてのマンガと小説の発達

本稿の目的は雑誌記事分析だが、雑誌メディアに隣接するメディアである、マンガ誌やマンガサイト、小説単行本や小説サイトでの動向をこの項では確認^{vi}、雑誌記事に生じている変化の背景を理解したい。

2010年代のマンガはインターネットとスマートフォンの発達をうけて多様化し、画像処理が手軽になったこともあって描き手の幅が広がった。

こうしてセックスレスをテーマにした一群のマンガも現れ、アマチュア作家がブームを作り出すことも可能になった。セックスレスをテーマにしたマンガの、反響の大きい代表的作品を、連載開始年の順に挙げる。

- 2009年～2011年『コーラス』連載 花津ハナヨ『情熱のアレ』
- 2016年 Ameba ブログに「実録漫画」連載開始 まゆ『スキンシップゼロ夫婦』
- 2017年『漫画アクション』連載開始 ハルノ晴『あなたがしてくれなくても』
- 2017年『レタスクラブ』連載開始 おぐらなおみ『私の穴がうまらない』
- 2018年『月刊コミックフラッパー』(読者は女性中心)連載開始 とがめ『実は私セックスレスで悩んでました』
- 2018年『fufu』連載開始 萩原ケイク『それでも愛を誓いますか?』

花津ハナヨ『情熱のアレ』はセックスレスカップルを描いた女性向けマンガの、先駆的作品である。2009年連載開始時の読者の反応について、編集担当者はこう語る。「「こういう連載を待ってた」という人と、「こういう作品はやめて欲しい」という人にハッキリ分かれました。でも回を重ねるごとに反対派が何も言わなくなって、アンケートの順位も面白いように上がっていきました。」^{vii}続いて2016年、交際6年結婚4年目のまゆが、妻と手もつなげないほどのシャイな夫との、結婚生活の実録『スキンシップゼロ夫婦』を投稿し始めた。このブログは1000万PVを超える注目を得て、

vi セックスレスをテーマとしたマンガと小説は、女性雑誌とのつながりが強いので本項を女性雑誌の節に入れたが、全ジャンル向け雑誌とのつながりもあり、男性雑誌とのつながりも皆無ではない。

vii https://www.cyzowoman.com/2011/10/post_4490_1.html

商業誌にも掲載されるようになった。

これがマンガ界に、セックスレスカップルの日常を描くという潮流を生み出し、上のように続々と注目作品が生み出された。ハルノ晴『あなたがしてくれなくても』の単行本の販売は、累計500万部（2021年現在）を超え、男女問わず読まれているという。

担当編集者との打ち合わせの中で、セックスレスをテーマに描くことが決まって誕生した『あなたがしてくれなくても』^{viii}は、些細なりアリティの積み重ねが読者の心を強く揺さぶると評される。ハルノ晴は本作品を、自分自身が体験した感情やエピソードを基に描いていると述べ、「人を描くのいちばん大事なのはやはり感情だと思いますし、だからこそ滲みでるリアリティもあるのではないか」と言う^{ix}。従来の雑誌におけるセックスレス関連の記事とは異なり、マンガという表現形態はセックスレスを、体験する当事者の感情と関係性の繊細な機微ごと捉えるようになったと言える。

これらの作者が30代女性を中心とすることは着目すべきだ。世代的に見ると2000年代前半、性行動の低年齢化が「性の乱れ」と社会問題とされる中、恋愛ブームに背中を押されて性行動に踏み出していった人が多い世代だ。「性的同意」という概念もまだなく、「愛してるんだろ？」と男性に迫られると断る術もなく、避妊や性感染症予防の人々の意識が2010年代よりもかなり低い中性行動をおこない、さまざまな傷つきや不快を経験した女性が少なくないと言える。彼女たちはまず体験に飛び込み、遅れて自分の体験や思い、相手との関係性などを描きながら言葉や思想を獲得しているのだと考えられる。読者層については不

明だがおそらく同年代で、同様の体験や思いをもつ人たちが多くのではないか。これは女性たちによるセックスレスの当事者研究（熊谷 2020）と言える。

作者はセックスレスという難問との格闘を通じ、自分はただセックスがしたいのか、それとも夫とのセックスがしたいのか、セックスレスでも仲はいいという状態で満たされるのか、満たされないのか、夫と一切のボディタッチがなくても夫との空気を愛せるのか、それは無理なのか・と問い、自分の言葉を獲得していく。作者たちはそのようにして性の主体になっていく。読者たちもともに。これらのマンガを愛読する男性読者もいるが、男性自身がセックスレスに関しておこなう表現は、今のところ未発達だ。それはなぜだろうか。男性たちがこれまで性の主体なのは自明だった。セックスを主導し、男性同士で性の話をし、男性の性を満足させるメディアもサービスも利用した。しかしコミュニケーションに開かれていないそのような主体は、セックスレスに対処できず、立ちすくむ。セックスレスは主体の危機として体験される。性の主体でなかった女性が主体になることは比較的単純かもしれず、性の主体だった男性が一度それを破壊して主体を作り替えていくことは、より複雑な仕事かもしれない。セックスレスマンガを愛読する男性は、それをしている先駆者かもしれない。

続いて小説の分野を見よう。こだま『夫のちんぽがはいらぬ』は、元小学校教師の主婦が2014年、夫との挿入ができずに苦しんできた約20年の実体験を同人誌に投稿して、大きな話題になった作品だ。2017年に講談社から単行本が

viii 「こんげつのブックマーク EX」『ダヴィンチ』2018年11月号 56-57頁

ix 同上 56頁

刊行されると、1か月で13万部が売れ大評判になる。マンガ化、ドラマ化、映画化、英訳もされた。性器挿入ができないという稀な現象を経験し、カップルで十分話し合えず、誰にも相談できないまま、常識的な解決とは別の、固有の道に歩いていく。普通であることの呪縛から時間をかけて離れながら、著者は、学術的知識とは異なる性と親密性についての独自の理解にたどりついているように見える。語りにくい問題を正面から描いたことと共に、内向的な主婦が性生活の難問に一人取り組み思想を切り拓く力量も、人々に衝撃を与えた。

これに触発されて、自分の夫婦生活を私小説的に描く女性のアマチュア作家たちが多く現れている。「セックスレス小説」というジャンル名も作られた。職業作家の作品としては次のものが高い評価を得ている。

- ・紫原明子『家族無計画』朝日新聞社 2016
- ・柚木麻子『奥様はクレイジーフルーツ』文芸春秋 2019

マンガと同様、著者たちの多くが女性だということは興味深い。しかし男性の読者や著者も現れており、彼らがセックスレスをどのように捉え、どのような性的主体となり、どのように性に関してコミュニケーションをしようとしているのかを分析することは、今後の課題としたい。

4 全ジェンダー向け雑誌

4-1 全ジェンダー向け週刊誌・月刊誌

男女の身体的差異と加齢による変化、妊娠や不妊や不妊治療と性、双方の欲求や希望のずれ、言葉でのコミュニケーションの改善法、など、セックスレスに関連して、ジェンダーの特定がない雑誌でこそ取り上げられるはずのトピックは多い。『週刊朝日』『週刊新潮』『週刊文春』『サンデー毎

日』らの新聞社系、大手出版社系週刊誌は、男女双方の読者に配慮した誌面作成に数十年以上の伝統をもち、性に関する男性目線の記事を書ける場合も節度を保ち、また性に関する女性向きの記事は基本的に載せない。この男性雑誌とも女性雑誌とも異なる全ジェンダー向け雑誌に、カップルの性やセックスレスに関する、政治や経済のトピックと同様の公共の話題としての記事が現れるようになったのは、2004年から2005年にかけての『AERA』であり、斎藤珠里記者の執筆記事だった。斎藤が『AERA』を離れて渡仏した2006年以降、『AERA』のセクシュアリティに関する記事は減少するが、斎藤が始めた公共の話題として性を語る姿勢や論調は、『AERA』や他の全ジェンダー向け雑誌に受け継がれたように見える。

本研究で調べた2015年以降の全ジェンダー向け各誌は、トピックやその論じ方に工夫をしているが、工夫の余地があると思われるものもある。例えば『AERA』は、夫婦の役割分担と性関係の関係に着目することが多く、それ自体は意義があるだろうが、「家事レス、セックスレス 二大地雷原どう渡る？」(20170320『AERA』)、「人にいえない性の悩みアンケート No.1はセックスレス」(20180528『AERA』)など、男女の互いへの不満をただ多数掲載するだけで、解決の糸口が見えない記事も見られる。

『Tarzan』は、性を広い視野からとらえようとする特集を組んでいる。「新編性学 オーガズム、避妊、セックスレス 自分で自分のカラダを知る 男女で異なる性反応」(20170824『Tarzan』)これはポルノ的な要素のない大人向け性教育テキストであり、カップルでも読めてコミュニケーションのベースになるだろう。

週刊誌も、現実を直視しつつ希望の方向を見出し、男女のコミュニケーションを促す記事を工夫している。次項で述べるが、2016年以降専門家

達が、セックスレスをテーマに単行本を出版していき、そのことに触発された雑誌記事は多い。「1冊まるごと男と女のトリセツ 本当の旬は50代から！中・高年の性愛「白書」(20200209『サンデー毎日』)、「中・高年「新しい性生活」のすすめ」(201911『文藝春秋』)、「超高齢化社会を生きる 夫婦円満の秘訣」(201501『ことぶき』)などである。高齢者の性や高齢カップルの性生活という、従来避けられてきた話題も、単行本の刊行を受けて雑誌が特集するようになった。「人に言えない高齢者の性の悩み」(20190830『週刊朝日』)、「長寿社会における「性欲格差」」(20190208『週刊朝日』)などだ。複雑なセックスレス現象を臨床、研究してきた専門家たちが提供する知見は、非専門家の断片的・一面的な意見とは大きく水準が異なる。

中でも、荒木乳根子が書き下ろした8頁にわたる「中・高年「新しい性生活」のすすめ」(201911『文藝春秋』)は、雑誌記事としては類のない質量である。臨床心理士ならではのきめ細やかな文章で、多くのカウンセリング例を挙げつつ、中・高年にとっての性生活の意義、男女のずれの現実とそれを乗り越えた幸せな例などを平易に説く。「セックスレスで悩んでいるのであれば、「どうやってセックスを行うか？」を考えるのではなく、まずは一日一回でも、心が安らぐような肌と肌の触れ合う機会を探った方がいいでしょう。先に見た例のように、「挿入にこだわらない」は「中・高年の性生活」にとって極めて重要です。」このように、性を日々の心と身体のコミュニケーションの文脈に置き直しつつ、カップルのコミュニケーションを立て直す道筋を示している。

多くの全ジェンダー向け雑誌が荒木にコメントを求めており、そのいずれでも荒木は、行為としてのセックスよりもカップルのコミュニケーションに焦点を当て、人々の発想の転換を促している。「セックスを成功させることより、加齢による体

の変化に合わせて“セックス観”を変えていくほうが大事」(「人に言えない高齢者の性の悩み」『週刊朝日』)、「セックスはコミュニケーションの一つ。会話の延長線上にあるものなのに、いきなり“行為”に走られても、相手は戸惑うばかりです。」(「平成の終わりに考える セックスレス幸福論」(20190224)『サンデー毎日』)、「まずは目で触れ合うこと。夫婦も長くなってくると、お互いに顔を見ずに話していることも多いですから。次に大事なのは言葉です。」(「中・高年の性愛「白書」『サンデー毎日』)

荒木のほか、北村邦夫、大川玲子、宋美玄ほかの産婦人科医、阿部輝夫らの精神科医も、しばしば記事にコメントを表明している。医師が性生活やセクステクニックに関して人々に助言する役目を果たすのは、明治以降連続と続いている。これら医師たちも、カップルのコミュニケーションが重要で、挿入や射精にこだわらない方がよいとは主張するが、一方で性交痛、更年期障害、勃起障害等の医学的な治療をおこなう立場のため、感情や関係性やコミュニケーションの重視が不徹底な場合もある。これらを見ると、臨床心理学領域の専門的な実践や研究が、セックスレスの問題の理解や解決に大きな貢献をするのではないかと考える。

4-2 背景としての専門家の単行本刊行

2016年以降、セクシュアリティ研究や臨床の専門家たちが、セックスレスを含む日本人のセクシュアリティに関し、次のような著書を刊行してきた。本項では2-3同様、雑誌記事の変化の背景を理解するため、それらの動向と内容を一覧したい。刊行年順に示すと以下ようになる。

- ・2010年 宋美玄『女医が教える 本当に気持ちのいいセックス』ブックマン社 ほか宋の著

作

- 2016年 荒木乳根子他『セックスレス時代の
中高年「性」白書』harunosora
- 2019年 日本性科学会セクシュアリティ研究
会・荒木乳根子他『中高年のための性生活の知
恵』アチーブメント出版
- 2019年 宋美玄『セックス難民 ピュアな人
しかできない時代』小学館新書
- 2020年 大川玲子・今井伸監修、犬山康子著『シ
ニア世代の愛と性』平原社

2010年から5年ほどの間、宋美玄はセックスレス問題を扱うほぼ唯一の専門家として、多数の著作を刊行して大きな影響力をもってきた。他の著者たちは、カップルのセックスレスに関する臨床経験を多くもつが、専門誌に論文を発表してきたので一般向けの著書が待望されていた。著者たちの専門分野は、婦人科医（宋美玄、大川玲子）、泌尿器科医（今井伸）、心理臨床家（荒木乳根子、金子和子）で、その見解は世界的な現代のセクシュアリティ研究の知見に基盤をおき、臨床経験に基づいたエビデンスのあるものだ。

この専門家たちが繰り返し勧めるのは、性器挿入だけを目的にしないことと、カップルの日常的なボディタッチと言葉のコミュニケーションを大事にすることである。当を得た提案は、日本人の性にゆっくりと効果をもたらしていくのではないかと考えられる。大川玲子・今井伸（2020）、宋美玄（2010、2013、2019）らは医学に基づき、日本人の多くが知識不足の、加齢、妊娠、出産、更年期、病気などによる身体的変化やEDなどの問題に関する知識を、総合的に提供している。性的身体の年齢的な変化やライフイベントでの変化への生物学・医学的知識をカップルが共有することは、コミュニケーションに重要だと思われる。荒木乳根子他（2016）は、中高年の人々の性的ラ

イフスタイルに関する調査結果と分析をもとに、セックスレスの現状とよりよい性生活への提言を述べている。2012年調査では2000年と比べて、セックスレス夫婦の割合が増えただけでなく、不倫を許容する人や不倫の実行者が増加しているという結果も、社会的議論を引き起こしてきた。

これらは4-1で見たように雑誌にも取り上げられた。セックスカウンセリングが未発達な日本では、性の専門家の知識の社会的還元は、単行本から雑誌を経由するルートを中心としている。

5 考察

5-1 セックスレスに関する雑誌記事

以上の分析から、まず男性週刊誌ではセックスレスをポルノ表象の構成要素として扱うものが数多く、あるいは「負け組」と脅し自嘲する記事も見られる一方、セックスレスを含む性の話題を一切取り上げない男性雑誌が圧倒的に多いとわかる。女性雑誌は対照的にセックスレスを特集記事などでしばしば取り上げる雑誌が多く、2016年頃以降セックスレスをテーマとした小説やマンガの影響も強くなり、女性たちが自分にとっての性を考える機会を豊富に提供している。これらの雑誌の影響を受けるなら、男性は女性の身心を大きく誤解するか、性の話題の前で何も考えられない状態になり、一方女性は性に関する自分の言葉を反省的に紡ぐが、このような男性と女性の異性愛カップルは共通の知識や発想の基盤をもたないため、性に関するコミュニケーションに大きな困難をもつと推測される。男性雑誌と女性雑誌が性に関して異なる表象を提示する限り、そのジェンダーによる分断自体がコミュニケーションを阻害する環境となりうると考えられる。女性雑誌に大人向けの性教育の内容は多いが、子ども向けの性教育と同様、大人でも性教育を全ジェンダーで共有する

発想が必要だ。

全ジェンダー向け雑誌は、カップルが共通の知識や発想をもつことを可能にし、コミュニケーションを促す環境となりうる。各誌が内容を工夫しているが、特に2016年以降は専門家による臨床的エビデンスのある内容の著書の刊行を受けて、カップルのコミュニケーションを促す内容が雑誌にも提供されるようになった。

つぎに、セックスおよびセックスレス概念自体の問い直し、という根本的な議論が起きていることが見出された。男性雑誌、女性雑誌、全ジェンダー向け雑誌いずれでも、「セックスレスになってからが本当の夫婦」(20170817『女性セブン』)、「セックスレス幸福論」(20190224『サンデー毎日』)、「セックスレスの彼方に真の幸せ」(201904『週刊実話臨増』)のような、単純なセックスレス解消ではない方向がしばしば提案されている。男性がセックスを射精と結びつける一方、女性は性的ふれあいを求めるという認識上欲求上のずれが反省的に論じられることも多い。男性たちの考えてきたセックスとは大きく違うが^x、男性が女性の感覚に歩み寄ってふれあい慈しみあうことで、双方がより満足できる交流ができる、このような方向の提案は、精粗はあるが増加している。女性の認識と欲求に沿ったセックスの概念の作り直しが行われているともいえる。

5-2 今日のセックスレス現象 残された課題

これまでの分析から、2010年代後半の特に女性向け雑誌は、ブログや作品投稿サイトなどのアマチュア作品が引き起こしたトレンドを含む、オンラインメディアの動きが大きく反映しているこ

とがわかった。オンラインメディアが女性の自己表現をエンパワーする例(田中 2013)だと言える。一方、男性向け月刊誌はセクシュアリティの話題を扱わないこともわかり、男性の性に関する意識形成に影響を与えているのはオンラインメディアではないかとも推測される。セクシュアリティのトピックに関するメディア研究として、雑誌分析の限界とオンラインメディアの分析の必要性が明らかになった。

本研究は記事に注目し、コミュニケーションが促されるか阻害されるかという読者への影響は推測するにとどまる。その影響を正確に測るにはオーディエンス研究が必要である。

いったん目を「セックスレス」以前へと転じてみよう。大塚明子の『主婦の友』の分析によると、高度経済成長期には一般女性たちが「女の告白半生記」などで赤裸々に自分の性を語り、不感症など質的な不充足や、セックスの回数の少なさの不満を1950年代後半から声高に訴えるようになった。(大塚 2018) 60年前の女性達のセクシュアリティに関する自己表現、性的主体化と2010年代のそれはどのように違いどのように同じなのだろうか。「性的主体(化)」は諸側面や段階を含む複雑なものだと考えられ、その詳細については別稿で改めて考えたい。

冒頭に掲げたグラフから、セックスレスカップルの割合は2010年代後半も増え続けているとわかる。本研究で、2010年代後半には全ジェンダー向け雑誌に、異性愛カップルの性に関するコミュニケーションを促進させる環境となりうる言説も現れたことを見たが、それでもセックスレスカップルの割合が増加するのはなぜだろうか。これら

x 日本性科学会の「セックスレス」の定義には、セクシャルコンタクトもないことが含まれており、射精のあるなしは問題でなかったのだが、人々の解釈の中で「セックスレス」の定義が変化してきた点には注意しなければならないだろう。

の言説の影響範囲が小さいからという理由や、男女のメディアの分断などコミュニケーションを阻害する要因がより強いから、という可能性もある。また、雑誌記事の言説に触れた読者が、現実の生き方を変えるには時間がかかるからという理由も考えられる。これに関して、著者とアリス・パッハーがコロナ流行下に日本でおこなった「コロナ流行と性」調査によると、2020年5月6日には、カップル関係とカップルの性生活が改善した、という回答者が予想外に多く（平山・パッハー 2022）、日本のカップルの潜在力が浮かび上がった。雑誌記事で知って暖めていた発想を、コロナ流行下で初めて実践した人たちもいるのではないだろうか。メディアの受け手が、メディアの影響をどのように受けているのかは、本研究では実証できなかったので、次なる課題として調査したい。

さて、西洋諸国でも報告されている性行動の減少現象にも触れておこう。おおむね 2000 年頃から、性的パートナーを作らない、パートナーとの性行動の頻度が減る、性欲の減退などの変化が起きていたことが、2010 年代後半に米、英、独、オーストラリア、フィンランドなどで報告されるようになった。（Peter et al. 2020）（Beutel et al. 2018）（Wellings et al. 2019）その要因については議論がされているが、オンライン技術のもたらす仕事や生活の忙しさ、オンラインエンタテインメントの増大、SNS 上の関係機会の増大が指摘されることが多い。パンデミック前にこの変化は起きていたが、パンデミックの影響にも注視しなければならない。^{xi} いずれにしても国際的な比較調査が必要である。日本人もまたこの同じ波を被っているとさえ、セックスレスの増加が続くのはそのためである可能性もある。

これらの議論が異性愛だけを取り上げた点にも限界がある。多様な性関係に関する調査や研究がきわめて少ない状況を変えていかなければならないだろう。

参考文献

- 荒木乳根子他『セックスレス時代の中高年「性」白書』harunosora, 2016
- 荒木乳根子他『カラダと気持ちミドルシニア版』三五館, 2002
- Beutel, Manfred E. 2018 Declining Sexual Activity and Desire in Men-Findings From Representative German Surveys, 2005 and 2016. *Sex Med.* 15(5): 750-756.
- 玄田有史他『仕事とセックスの間』朝日新書, 2007
- Giddens, Anthony. 1993 *The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love and Eroticism in Modern Societies*. Polity
- グループわいふ『性 妻たちのメッセージ』グループわいふ, 1984
- 平山満紀・パッハー アリス「新型コロナウイルス感染症流行下での日本人のセクシュアリティとカップルの関係性—2020年、2021年の調査結果の分析から」『心理社会学研究』16号 明治大学文学部, 2022（刊行予定）
- Hirayama, Maki. 2020, Sex as Leisure for Japanese Women. Kono, Shintaro et al. eds. *Positive Sociology of Leisure — Contemporary Perspectives*. Palgrave
- Hirayama, Maki. 2019, Developments in

xi Hirayama はパンデミックによる各国での人々の性行動の変化を以下に簡単に報告した。 <https://olympicanalysis.org/section-1/anti-sex-beds-fake-news-why-this-video-went-massively-viral/>

- Information Technology and Sexual Depression of the Japanese Youth since 2000, *International Journal of the Sociology of Leisure*, 2(1), 95-119, Springer
- 井上輝子, 女性雑誌研究会『女性雑誌を解説する : Compareopolitan : 日・米・メキシコ比較研究』垣内出版, 1989
- 石川弘義・斎藤茂男・我妻洋『日本人の性』文藝春秋社, 1984
- 亀山早苗『「妻とはできない」こと』Wave 出版, 2010
- 熊谷晋一郎『当事者研究—等身大のくわし>の発見と回復』岩波書店, 2020
- HNK「日本人の性」プロジェクト編『NHK 日本人の性行動・性意識』日本放送出版協会, 2002
- 日本家族計画協会『第8回男女の生活と意識に関する調査報告書～日本人の性意識・性行動 第1回～第7回調査報告書も収録』日本家族計画協会 (CD-ROM 版), 2016
- 日本性科学会セクシュアリティ研究会・荒木乳根子他『中高年のための性生活の知恵』アチーブメント出版, 2019
- 奥村敬子他「FSFI (日本語版) を用いた日本人女性の性機能インターネット調査 2012」『日本性科学会雑誌』(38)1,43-54
- 大川玲子・今井伸監修、犬山康子著『シニア世代の愛と性』平原社, 2020
- 大塚明子『「主婦の友」にみる日本型恋愛結婚イデオロギー』勁草書房, 2018
- バッハー アリス「2000年代のセックスレス現象を日本の男性誌・女性誌はどう描いているのか - 解消法に注目して」『文学研究論集』(50), 147-167, 2019
- バッハー アリス「現代日本社会におけるカップルの親密関係及び性関係とその国際比較 —セックスレス現象の分析から—」2019年度 明治大学大学院 文学研究科博士学位請求論文, 2020
- 劉雨瞳『『non-no』と『MEN'S NON-NO』から見た若者向け雑誌における言語表現』『Core Ethics』(13), 2017
- 宋美玄『セックス難民 ピュアな人しかできない時代』小学館新書, 2019
- 宋美玄『女医が教える 本当に気持ちのいいセックス』ブックマン社, 2013
- 高橋幸『フェミニズムはもういらぬ、と彼女は言うけれど ポストフェミニズムと「女らしさ」のゆくえ』晃洋書房, 2020
- ヴォダック・ルート, マイヤー・ミヒャエル著 野呂香代子『批判的談話分析入門』三元社
- 田中洋美「ジェンダーとメディア研究の再構築に向けて」『国際ジェンダー学』(16), 34-46, 2018
- 田中 和生「LITERATURE 現代文学を読む (31) 戦後マンガの外でセックスレス夫婦を描く」『Will』(173), 300-303, 2019-05
- 田中東子「オンライン空間と女性たちによる表現文化の分析可能性」『マス・コミュニケーション研究』83, 2013
- 辻泉「雑誌に描かれた男らしさの変容—男性ファッション誌の内容分析」『人文学報』(467), 27-65, 2013,
- 諸橋泰樹『メディアリテラシーとジェンダー』現代書館, 2009
- Ueda, Peter et al. 2020 Trends in Frequency of Sexual Activity and Number of Sexual Partners among Adults Aged 19 to 44 years in the US 2000-2018. *JAMA Netw Open*. 3(6)
- ユネスコ編, 浅井春夫他訳『国際セクシュアリティ教育ガイダンス』明石書店, 2017

Wellings, Keye et al.2019 Changes in, and factors associated with, frequency of sex in Britain: evidence from three National Surveys of Sexual Attitudes and Lifestyles. *BMJ* 2019; 365

参考サイト

Jex + 日本家族計画協会『Jex Japan セックスサーベイ』<https://www.jfpa.or.jp/sexsurvey2020/>